The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世阿弥の「作り能」：『山姥』から『砧』まで
Author(s)	Szabo, Maria Ilona
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36410
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	SZÁBO MÁRIA ILONA（サボー マリア イローナ）
学位の種類	学　術　博　士
学位記番号	第　8361　号
学位授与の日付	昭和63年10月26日
学位授与の要件	文学研究科　芸術学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**世阿弥の「作り能」** **――『山姥』から『砧』まで――**
論文審査委員	(主査) 教　授　山崎　正和 (副査) 教　授　谷村　晃　　助教授　天野　文雄

論文内容の要旨

本論文は世阿弥の「作り能」(典拠のない創作能）につき，その定義，特質，および能作史上の位置づけなどを論じたもので，下記のような構成からなっている（原稿枚数は400字詰246枚)。

第一章　「作り能」の定義と評価（70枚）

1．世阿弥の伝書に見える「作り能」

2．世阿弥における「本説」

3．「本説」の定義

4．「作り能」の定義と認定

第二章　作品論（157枚）

1．和歌の摂り込み方をめぐる検討

2．テーマをめぐって

3．『山姥』から『砧』まで

4．『砧』論――「作り能」の到達点

第一章では，従来，定義が曖昧だった「作り能」を，その対極にある「本説（典拠）ある能」の「本説」を正しく定義することによって定義づけようとする。世阿弥伝書にみえる「本説」の用法と，研究者によってまちまちな「本説」の定義を整理し，「本説」を〝一曲の主題，あるいは一曲全体の構成に関わる典拠〟とした上で，そのような本説を持たない能が「作り能」であると定位する。その定義に則って，論者は世阿弥の作品の中では<恋重荷・砧・高野物狂・逢坂物狂・土車・山姥・班女・花筐・東岸居士・西行桜・桜川・水無月祓・花月・西岸居士・住吉物狂・多度津・東北・木賊>の18曲を「作り能」

と認定する。そして，第二章における考察の前提として，この18曲につき，曲柄・梗概・素材・テーマ・世阿弥伝書の所見・上演記録の初見・研究文献の各項にわたり解説し，適宜「作り能」と認定した理由にも及んでいる。

第二章は，前章で「作り能」と認定した18曲をめぐる具体的な検討で，本論文の中心をなす章である。「本研究が最終的な目標としていることは『砧』までの発展を辿ることである。つまり，初期の「作り能」と思われる『山姥』から『班女』『桜川』『水無月祓』などをへて，世阿弥の到達点である『砧』までの道を辿ってみたい」と，本章の基本的な構想が示されている。

「和歌の摂り込み方をめぐる検討」では，世阿弥の「作り能」の中でも比較的和歌の引用が多い＜恋重荷・桜川・西行桜・東北・水無月祓・木賊・砧＞の７曲を取りあげ，かなり詳細に和歌摂取の様態を吟味している。その結果，＜恋重荷・東北＞はテーマと和歌が緊密にかかわっていない作品，＜桜川・水無月祓＞はテーマに即した和歌を多数とりこんだ作品，＜西行桜＞は和歌をもとに自由な創作の腕をふるった作品，＜木賊＞は一首全体の引用が目立つ作品，＜砧＞は世阿弥自身がそれまでの作品に引用した和歌を再び引用していることが顕著で，引用和歌の新鮮さより，表現された世界の新しさをめざした作品と，それぞれを定位し，世阿弥の「作り能」における和歌摂取の多様性と，後出の作品ほど和歌がテーマと緊密にかかわりを持っている傾向などを指摘する。

「テーマをめぐって」では，18曲を「恋慕」「恩愛」「妄執」の３テーマに分類し，それぞれのテーマの一貫性（あるいは結晶度）を，特に「趣向」と対比させて検討している。「恋慕」をテーマとする曲では＜水無月祓・班女・砧・花筐＞の４曲が対象とされているが，総じてこのグループの作品はテーマの一貫性が保たれ，趣向との調和がとれているとする。とりわけ，＜班女・花筐＞は，シテの狂女としての舞が恋慕という主題に密着した舞になっていると指摘し，先行研究によりつつ，その先縦として＜松風＞を想定する。＜砧＞については，恋慕の能が不可欠の要素としてきた舞をも排除した作品だと位置づけている。「恩愛」をテーマとする曲では＜高野物狂・土車・桜川・花月・木賊＞の５曲がとりあげられている。いずれも親子・主従の別離と再会を描いた物狂能であるが，このグループでは，テーマの一貫性がたもたれているのは，＜桜川＞くらいで，他の曲においては恩愛のテーマは単なる〝飾り〟で，一曲の主眼はシテの芸能者（物狂）としての舞を見せることに置かれているとする。また，「妄執」をテーマとする曲では，＜恋重荷・山姥・砧＞がとりあげられているが，＜砧＞以外の２曲は，やや趣向の方に重点があるとする。世阿弥の作品全体の中では，妄執をテーマとする曲は＜忠度・頼政＞といった修羅能をはじめとしてかなり数は多いが，「作り能」には少ないとの指摘もある。

「『山姥』から『砧』まで」は，論者が「作り能」の初期作品と考える＜山姥＞についての考察である。山姥という鬼女に妄執という人間的な心を持たせて，砕動風鬼（形は鬼だが，心は人）という世阿弥自身が許容している鬼能を創ろうとしたこと，＜山姥の曲舞（クセマイ）＞を得意とする都の女曲舞舞いの前に，越後の山中で本物の山姥が現れて曲舞を舞うという奇抜な構想などについて論じている。＜山姥＞が『三道』の模範曲の中に含まれていない点に注目して，後年の世阿弥はこの曲をさほど評価していなかったろうとも指摘している。

「『砧』論」は，本論文のまとめとして，能の中でも高い評価が与えられている＜砧＞の特質を，素材・

テーマ・先行作品との関係などから分析している。とくに素材として利用されている蘇武の妻の物語を巧みにテーマにふさわしく改変している点に注目し，「作り能」の到達点である＜砧＞の特質を「本説ある能」と「作り能」の中間的な位置にある作品だと結論づけている。

論文の審査結果の要旨

論者がとりあげた問題は世阿弥の「作り能」である。「作り能」とは典拠のない創作能のことで，ほとんどが何らかの先行文芸や事実に依拠している能の中ではかなり特異な能と言える。この「作り能」に言及し，実際に「作り能」を作っているのは世阿弥（およびその周辺作者）だけのようで，本論文が『世阿弥の…』としているのも，そうした事情による。しかも，世阿弥の発言や実際の作品からは，「作り能」は彼の晩年の能作法と判断されるから，世阿弥の能作法の変遷を考える上でも貴重な位置にあるのが「作り能」なのである。そうした問題を持つ世阿弥の「作り能」は研究対象としてはきわめて恰好のものと言える。「作り能」をめぐって，上述のごとき問題に挑んだ本格的な論考はいまだ出現していないのであって，この点，論者の意欲と着眼のよさは評価されてよいだろう。そして，副題にも窺える通り，本論文が「作り能」全体を対象とし，「作り能」各曲の位置づけをめざしている点も，「作り能」研究である以上当然とはいえ，妥当な構想と言えよう。もっとも，これも副題から窺えることだが，本論文はほとんど「作り能」のみを検討の対象としていて，「作り能」を世阿弥の能作法の中に位置づけるのに不可欠な，他の世阿弥作品との関連という視点を欠いている。部分的には言及されることもないではないが，やはりその視点は欠落していると言ってよい。その結果，前述のような多くの貴重な問題が，「作り能」に関わって存在しているにも拘らず，それらについてはほとんどが言及されることなく終ってしまっている。以上を概括的評価として，以下，各論に移る。

第一章は，論旨も明快で，本論文中では最もよくまとまっている部分である。世阿弥自身は本説というものをもっと広く（あるいは曖昧に）考えていたかも知れないが，中心的な定義としては論者の説く通りであろう。「作り能」の定義もこれが妥当であろう。むしろ，問題はこの定義によって，どの曲を「作り能」と認定するかであろう。ここには18曲が掲げられているが，たとえば，＜恋重荷＞は＜綾の太鼓＞（散佚曲）というモデル曲が存在しており，これを「作り能」としたのは疑問であるし，一応小町伝説に拠っていくとはいえ，創作的要素が強い＜関寺小町＞を掲げていないことも疑問である。おそらく，そうした疑問はさらに多く提出される可能性がある。定義は確立していても，実際の認定には各人の視点や主観が介在するからであり，「作り能」をめぐっては，この認定の問題が最も基本的な問題であると同時に，最も究極的な問題ということになるのかも知れない。なお，18曲の解題はかなりの頁（30枚）を費やしているが，羅列的な印象も強く，全体の論旨と有機的に関わっていない点に憾みが残る。

第二章の和歌の機能をめぐる分析はなかなかの労作である。要旨に記したような事実はそれぞれ貴重な指摘である。とりわけ，＜水無月祓＞と＜桜川＞の類似性の指摘や，＜東北・砧＞についての指摘は

なかなか興味深い。<東北>には，同曲の統一イメージたる梅花を詠んだ歌がないとの指摘は，<東北>非世阿弥説につながる可能性もはらんでいる。ただし，せっかくこの分析に先立って，応永30年の『三道』を境に各曲の成立時期を二分して，「作り能」の展開の相をあとづけようとしていたのが，実際には事実の報告に終っている。これは以下の分析にも共通する傾向である。

テーマをめぐる分析では，テーマと趣向を対比させた点が新鮮である。たしかに名作とされる世阿弥の作品はテーマと趣向が融合している点で，たとえば観世信光の名作<船弁慶・安宅>などとは質を異にしている。本論文の説くところによれば，世阿弥にも趣向を重視した作品が，とくに男物狂能に多く存在するわけで，世阿弥の能作法の変遷を考える上では，趣向という概念の導入は大いに有用であろう。ただし，テーマをめぐる分析は，やや粗筋のみを追うという印象もあり，和歌をめぐる分析ほどは精密な論とはなっていない。

残る<山姥>論と<砧>論は，論者の当初からの中心テーマだったようだが，既発表の論考を踏まえている<山姥>論はさすがにまとまっているものの，肝心の<砧>論が弱い。<砧>については，これまでの論述でかなり言及してしまったとの事情もあるだろうが，やはり点睛を欠く感が否めない。<砧>は素晴らしい作品だと言う気持ちが先走ってしまったことも，堅実な論にならなかった理由であろう。

以上，問題点もあるが，本論文には上述のごとく見るべき視点や報告，および意欲があり，学位が授与されるにふさわしい内容を備えていると考える。